

印西の石造物 -その2-

今号は、印西市内で一番多い「庚申塔」について説明します。

庚申塔(塚)は、最も普遍的で数多く、近世からの村落共同体建立の石塔を代表する石造物です。庚申待(こうしんまち)は、60日に1回庚申の夜に眠った人間の体から三尸(さんし)が抜けだし、天帝にその人の罪過を告げに行かないように徹夜するという道教に由来した信仰です。室町時代から庶民にも浸透して庚申講(こうしんこう)が行われるようになりました。講中の人たちが当番の家に集まり、一定の儀式のあと夜を徹して飲食を共にし、夜明けとともに解散します。この講を3年18回続けた記念に建立したのが庚申塔です。中世は板碑で、江戸時代初期から願文を刻んだ板碑型石塔や三猿とともに如来や菩薩像を浮彫した石仏が造られるようになり、寛文期(1661年～)からは、青面金剛(しょうめんこんごう)を本尊とする庚申塔も現れ始めます。下総地方の庚申塔は、青面金剛像塔→三猿付文字塔→「青面金剛」の主尊名の文字塔→「庚申塔名」の文字塔と、デザインが変化しています。現在も庚申講を続けている地域があり、庚申塔(文字塔)も建てられています。

青面金剛像塔の基本デザイン



三猿付文字塔



青面金剛名の文字塔



庚申塔名の文字塔



地域ごとに少しずつデザインが違って興味深い! 次号は、市内の特色ある庚申塔を紹介します。